

◆ 今週のコメント

- ヘルパンギーナの定点当たり報告数は、1.85(76例)と本年度で最も多くなっています。推移をみると、本年は増加の時期が遅れていたため、過去5年平均値に比べ低い状態が続いていましたが、今週は過去5年平均値(1.28)を上回る値となっています。
- 手足口病の定点当たり報告数は1.02(42例)で、第30週(1.22)をピークに減少しているものの、依然、多い状態が続いています。
- 新型インフルエンザ(A/H1N1)患者の集団感染(クラスター)の第30週以降の各週の報告数は、京都府(京都市を含む。)では、第30週は3件、第31週は7件、第32週は21件と増加しています。全国でも同様に、第30週は172件、第31週は335件、第32週は554件と増加しています。
- インフルエンザの定点当たり報告数は0.59(40例)で、過去5年平均値0.003(0.2例)を大きく上回っており、先週0.25(17例)に比べて、2倍以上に増加しています。年齢階級別では、15～19歳、20～29歳がともに12例と多くなっています。
ただし、第30週以降のインフルエンザの報告は、「新型インフルエンザ(A/H1N1)」を含んだ報告に変更されています。
また、第32週に集団発生の診断目的等のために京都市衛生公害研究所に搬入されたインフルエンザウイルス(22例)の型は、すべてAH1pdm(新型)となっています。

◆ 今週のトピックス: <腸管出血性大腸菌感染症>

第23週(6月)以降先週まで報告はありませんでしたが、今週(第32週)に、第27週～第31週分の追加報告が14例ありましたので、集計しました。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- 三類:腸管出血性大腸菌感染症 14例【1月以降の累積報告数 34例】
(O157 VT2 11例, O157 VT1VT2 2例, O111 VT1 1例)
- 四類:レジオネラ症(肺炎型) 1例【1月以降の累積報告数 6例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.59	40
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.66	109
	② ヘルパンギーナ	1.85	76
	③ 手足口病	1.02	42
	④ 水痘	0.83	34
	⑤ 突発性発しん	0.51	21
眼科	流行性角結膜炎	0.20	2

病原体情報

ありません。

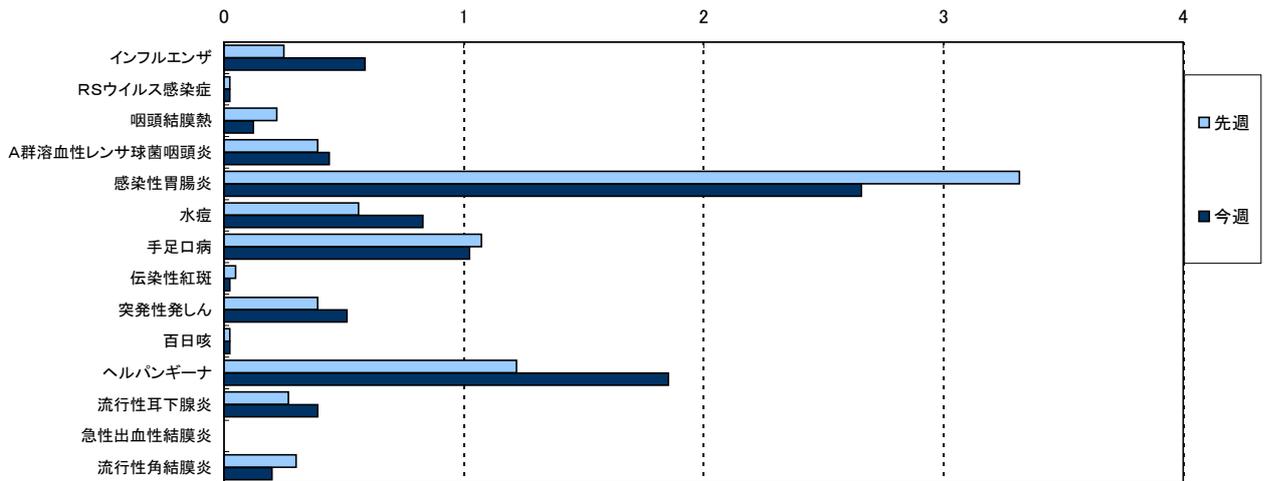
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <腸管出血性大腸菌感染症>

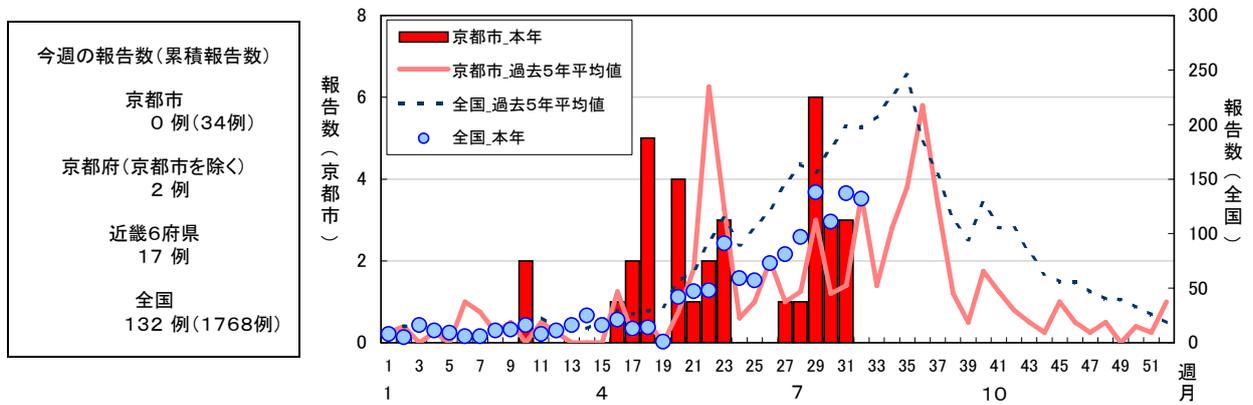
(注) 京都市のデータは、平成21年8月13日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。
病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第32週)と先週(第31週)の定点当たり報告数の比較

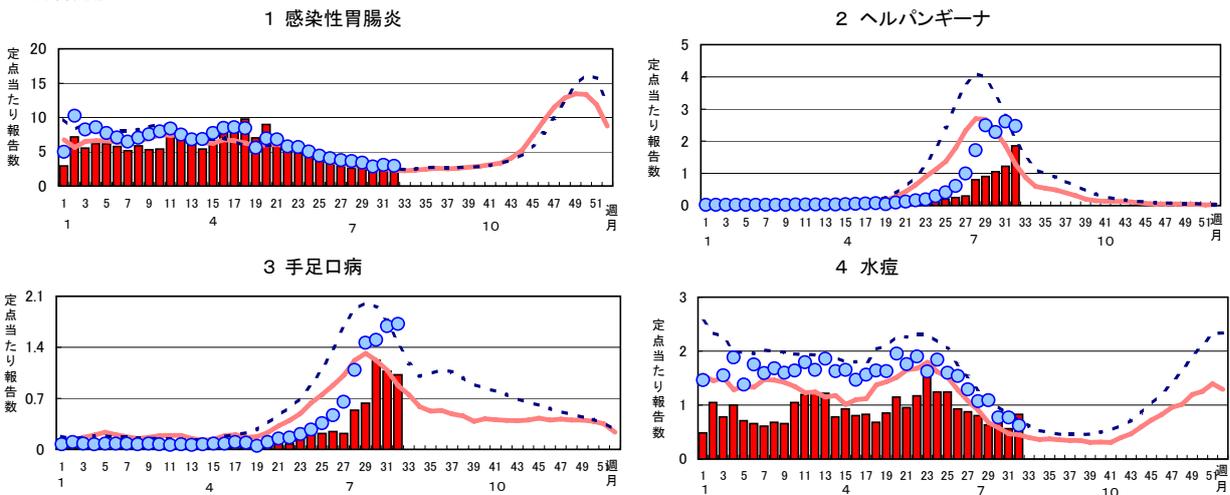


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

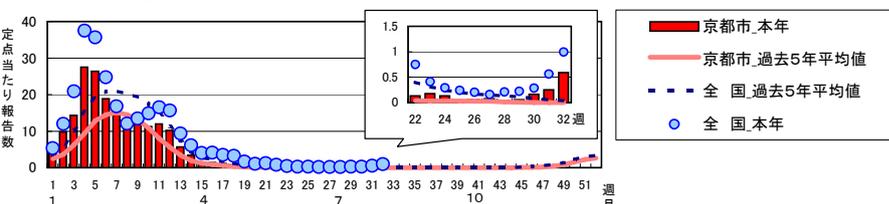


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<インフルエンザ定点>



今週(第32週)のトピックス: <腸管出血性大腸菌感染症>

第23週(6月)以降先週まで報告はありませんでしたが、今週(第32週)に、第27週～第31週分の追加報告が14例ありましたので、集計しました。

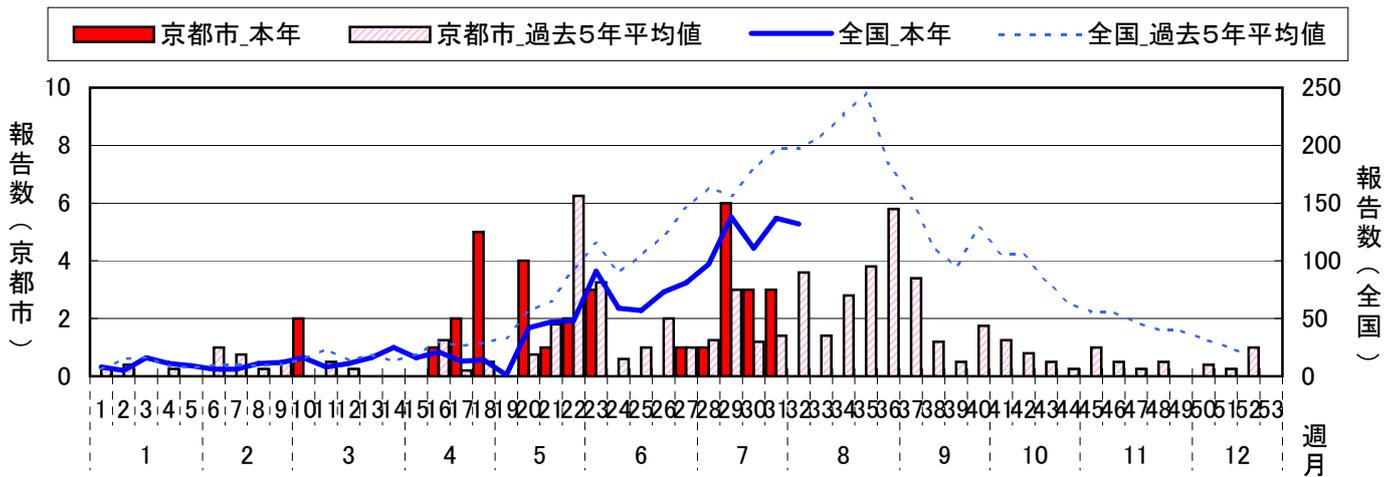
週別にみると、第27週～第31週まで毎週報告があり、第29週の6例が最も多くなっています。

年齢群(10歳階級)別にみると、20歳代(6例)が最も多く、次いで0～9歳(4例)となっています。

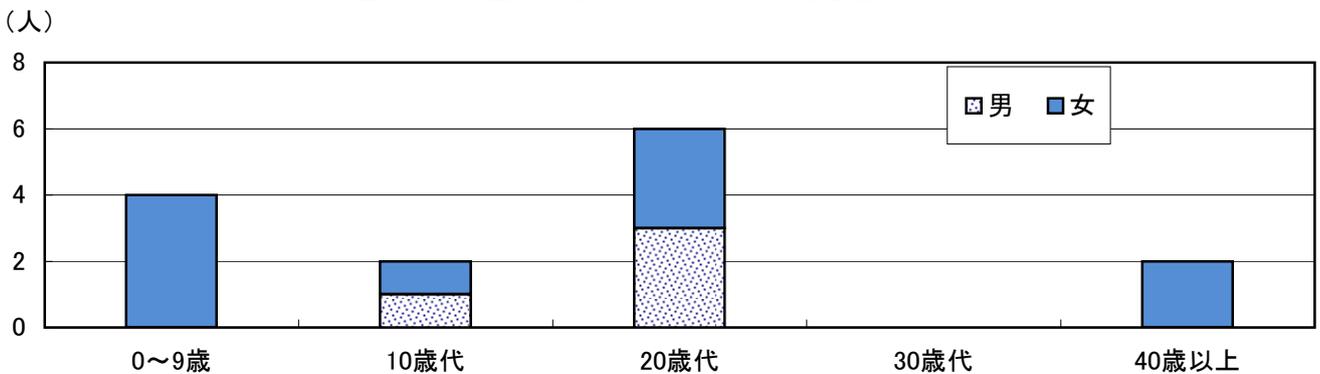
血清型別にみると、O157(VT2)11例、O157(VT1VT2)2例、O111(VT1)1例の3種類検出されています。

また、第1週～第32週の累積報告数を診断年別にみると、本年(32例)は、昨年の62例に次いで多くなっています。

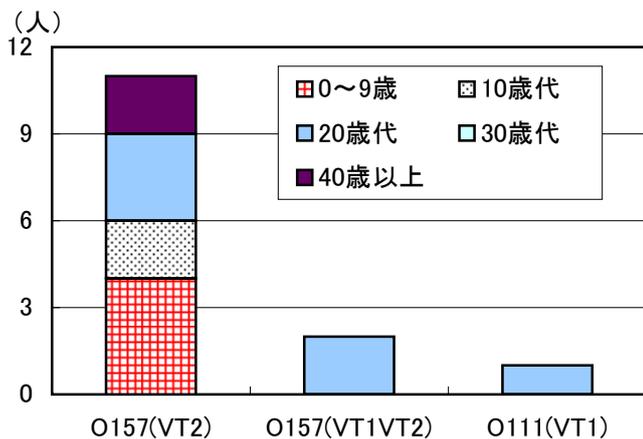
本年の週別発生状況の推移



第27週～第31週の年齢群(10歳階級)別性別報告数(n=14)



血清型別年齢群(10歳階級)別報告数(n=14)



診断年別累積報告数

